

PESTI ワークショップ  
知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策  
第1回 「知ろう」

～～～ 質疑応答のまとめ ～～～

Q は参加者の方からの質問、A は吉澤さんからの回答です。

Q ロボット技術に関心がある。ロボットの活用がイノベーションにつながるのではないかとソニーのアイボとか。

A 日本の技術は進んでいて素晴らしいものができているが、法制度が追いついていない。例えば、車の自動運転や介護ロボットなど、万が一の際の責任の所在が明らかでないためになかなか認められない。また、日本の技術は完璧を追いすぎることもあって、なかなか安いロボットができないという点も問題。

Q 事業仕分けで話題になった「二番では駄目なのか」というのは正論ではないか。必要なスペックに足りなければ当然頑張る必要があるが、スペックが足りているなら二番でも良いのではないだろうか。

A 個人としては2位でいいと思う。何を指すべきか、何のためにやるのか、国民の議論ができていない。スパコンだけに資源を投入することには議論が必要。

Q 各省庁を呼ぶシステムについて。「船頭多くして」のたとえそのものではないか。

A 真に動くシステムには今のところなっていないかもしれない。どれだけ機能するのか、権限の所在が不明確。まだまだ中途半端。

Q 科学技術基本計画の第三期までで具体的にどのような成果が上がっているのか。

A 第2期、3期のレビューはされているが、そもそも成果が検証可能な形で指標がほとんど設定されていない。そのため、十分な検証ができていないし、反省もできていない。

Q 科学技術基本計画の中で小中学生に対する教育はどうなっているのか。

A 大学院以上の教育は計画に詳細に書き込まれているが、小中高の教育にはほとんど触れられていない。

Q 科学技術に対する投入資金の額が何兆円と聞いて驚いた。大きな目的をちゃんと考えているのか、省益優先になっていないか。無駄な会議をしていないか。

A 会議が多いのは事実。各省の役人が省としてやりたいことを上げて来る。会議のやり方も確かに問題はあるだろう。ただし、科学コミュニケーションの一環として、会議のやり方自体を変えて行こうという流れもある。

Q 1960年代以来、科学技術基本法、科学技術基本計画が無くても何とかなっていたものが、計画や法ができることでむしろ悪くなっているのではないかと。

A 大きな方向が幅広い関係者で議論できるようになったことは良かったのではないかと。また、全体の流れを考える上で、だんだん社会と技術が近づいてきていることが見えるようになった。進めるためのインフラは整備された。人材育成はいい面も悪い面もあったようだ。

Q 原発の処理に代表されるような、倫理とか社会的な問題とかは総合的に議論されているのか。  
A 社会とともに創り進めるという部分については担当課も無く、ほとんど動いていない。科学技術の負の面はもっと議論されるべき。

Q 科学技術の進歩を行政は受け止めきれているのか。これまでに出てきた業績をしっかりとツールとして扱っているのか。  
A 科学技術の業績を収集する手段は実態としてない。有事にツールを利用できていないという面があるのは確かだろう。だからこそ「政策のための科学」というプログラムが作られた。

Q 科研費の採択を見ると、二番煎じのつまらない研究ばかりにお金がついている。真に独創的な研究が評価されているのか。  
A 資金配分機関の問題だろう。名前が知られている先生、見栄えのいいプロポーザルが採択される傾向にあるのは確かだろう。ピアレビューシステムの評価もできていない。企業など幅広い関係者にレビューに入ってもらう等の改革が必要ではないか。

Q 「人材の育成」といいながら高学歴ワーキングプアばかり生産しているのではないか。  
A その通り。基本計画ではポスドクを作ることは取り上げたが、そのポスドクをどうするかという出口が書かれなかったことが問題。雇用やキャリアパスの面も含めて人材育成がうまくできたかどうかの評価も必要。

Q 経済成長戦略に資する方向の科学技術基本戦略になっている。経済成長に直接関わらない基礎研究にお金を付けなくて、なぜ科学技術立国と言えるのか。  
A 目先の技術にお金が付いているのは事実。基礎研究とのバランスが重要。一方で、基礎研究をする側も、社会に対する貢献度をもっとアピールする必要はあるのではないか。

Q 若手公務員を巻き込んだイベントを開催してはどうか。  
A 政策デザインワークショップというのを試行して、若手の行政官を巻き込む取り組みをしている。

Q 若手研究者の側から行政をつつついてみてはどうか。  
A ポスドクがサマースクール的に行政でインターンするなど、できるのではないか。

Q 大学の基礎体力アップにはお金をかけているのか。  
A 基盤経費はどんどん減らされている。大学としても国からの資金を待つばかりでなく、戦略を考えて効率的に動く必要がある。

Q 医療ビジネスの課題ととりくみについて。  
A 医療の分野は特殊で、科学技術イノベーション戦略とは別建ての資金配分機関の創設が進められている。医療技術は進歩しているが、法律の枠組みの中でビジネスとして動かすには難しい状況にある。

Q クリーンで経済的なエネルギーシステムについて。風力発電には見込みがあるのか？もっと革新的な発電アイデアは？  
A 風力発電の発電量の少なさ、設置可能な土地の問題、低周波問題などを考えると、日本で風力発電がこれ以上広まることは厳しいのではないか。洋上風力のアイデアはあるが、コストが高い。新たな発電技術としては地熱発電、潮汐発電などがある。